

第3回コーポレートアートエイド京都
(CORPORATE ART AID KYOTO)
入選作品



NO.01

王の見張り台

彩蘭弥 (Alaya)

多摩美術大学日本画専攻卒

チベット地域の雄大な景色を、魂が震えるままに描いた。濃紺の空は点描で、手前の旗やハゲワシには純金箔などをふんだんに使った、技法的にも画材的にも贅沢な作品。

和紙に和絵具、金箔、プラチナ箔、銀箔

1300×1620mm(額有り)

NO.02

桜陰



伊藤 寛人

東京藝術大学美術研究科芸術学専攻
美術教育研究分野修了

公園でひっそりと咲く桜を見た時、ありきたりではあるが、その姿に日本人が尊ぶ生死感や美意識がよく現れていると思った。水辺に咲く桜が、川や湖の水面に映る様子を桜影というが、桜に映る自分はどのような姿をしているのだろうと思いこの作品を制作した。

日本画画材とエポキシ樹脂の併用技法
岩絵具、水干絵具、錫箔、エポキシ樹脂、
アクリル絵具、木製パネル

940×1620mm(額有)



NO.03

王さまら

加藤 健一

東京藝術大学大学院美術研究科油画修士修了

王様たちの絵です。油絵絵具を薄く溶いて、下地に染み込ませるよう鉛筆の形を残して生かして描いています。小さめの筆を使い、あえて色にムラが出来るようにしています。王様たちは似ているようで皆違います。みんな違った色や形を持っていて。

キャンバスに油彩

1167×910mm



NO.04

AM945kHz

亀田 千晴

京都市立芸術大学美術学部美術科

無限にも思えるほど見渡せる平野に、開放感と逆説的な閉塞感が同時にある。

キャンバス、油彩

1620×1303mm(額有)



NO.05

緑陰恵風

簡維宏

京都芸術大学大学院博士課程芸術専攻芸術研究科

池沿いの枝垂れ柳は恵風を受けて芽吹き、その美しさは格別である。瑞々しい柳の芽は、優美な姿であると同時に生命の力強さも感じさせてくれる。華やかに芽吹いた枝垂れ柳が新緑に染まる頃には、植物や昆虫が春を迎えた喜びに栄えることだろう。

麻生地着彩、典具帖紙、岩絵具、古墨、金泥

2270×1620mm

NO.06

光に思い巡らす

木岡 史

京都市立芸術大学大学院美術研究科
修士課程絵画専攻日本画修了

炎には、自己との対峙を促す作用があると考えられる。炎の特性を画面に落とし込むことで、鑑賞者と作品の間に同様の作用を生成する関係性を築くと共に、作品内に思考の余白を生み出すことを目指している。

高知麻紙、岩絵具、水干絵具、コンテ

1620×3240mm





NO.07

虎 24.12.28.1(左)

虎 24.12.28.2(右)

菊地 虹

立教大学文学研究科教育学専攻博士後期課程

洋画の技法や考え方と、日本の絵画の様式を掛け合わせて描いた。絵画の普遍的な性格を模索した。

キャンバス、アクリル絵具、竹（掛け軸）

1750×1100mm



NO.08

夢の中の花園

~Flower garden in dreams~

キリコカ

明治学院大学・文学部芸術学科・美術史専攻卒

形に捉われず、夢の中で見た花園の色合いや光にフォーカスを当て、抽象化して描きました。花が色鮮やかに咲き誇るフランスで生まれ、緑豊かな鎌倉で育ちましたので、幼い頃からの自然への愛着が伝われば嬉しいです。

キャンバスに油彩

1167×909mm



NO.09

私とタネと花と土

幸山 ひかり

京都市立芸術大学大学院修了

タネはこれからの“未来”、花は咲き誇る“今”、そして土はこれまで命を繋いできた“過去”の蓄積です。その前に私が立っている。という意を込めました。

麻紙に岩絵具、水干絵具、土絵具、箔

1620×1620mm

NO.10

春のある光景

桜井 旭

金沢美術工芸大学大学院美術工芸研究科博士後期課程



ある日、線路沿いに自転車を漕いで、気になる場所をスケッチしながら海まで行った。道中、ふと足が止まり、この風景をスケッチした。一軒家が犇く中に初夏の小さな水田が異様に美しく私の目に写った。

油彩、キャンバス、板

1300×1620mm



NO.11

桜煙

佐藤かりん

京都市立芸術大学美術科日本画専攻

桜をうねるように描いた。
下向きではなく、上向きの構図にした。

綿布著色

1455×1120mm



NO.12

pattern

佐野 直

福岡教育大学生涯スポーツ芸術課程美術領域卒

船が通った後の水面を描いています。
水面が静かすぎたせいか、水が美しすぎたせいか、何かの記号のような不思議な模様が浮かび上がりました。

油彩・アクリル／パネル・綿布

1303×1620mm



NO.13

あみだ

しんそう

神戸大学人間発達環境学研究科美術専攻

宗教を演出する要素をテーマに作品を制作している。本作では、自身の中に神秘を見い出そうともがく俗人をイメージした。

キャンバスに日本画材、ペン

1620×1303mm



NO.14

three boards

たかし

大分県立芸術文化短期大学専攻科造形専攻美術コース

この作品は、視点を正面から横にずらすと、だんだんと絵画空間が崩れ、真ん中のキャンバスは「絵画空間の一部」から「そこに置かれている板」へと変化する。これは、「絵画とは、ただの板である」ということを示す。

キャンバスに油彩

3000×1900mm



NO.15

garden

高田 紗衣

京都市立芸術大学日本画専攻卒

人と植物の共生をテーマに庭を描いた。

紙本著色、高知麻紙に岩絵具、水干絵具など

1818×2273mm



NO.16

水鏡

高野 光

武蔵野美術大学 大学院造形研究科修士課程
絵画専攻油絵コース修了

水面に映る風景と藻の重なり合い、水の流れている感じを絵画的に表現しました。

写真/インクジェットプリント

1233×885mm(額有)



NO.17

春陰

高林 ゆり

京都市立芸術大学美術学部美術科日本画専攻

春に出会った惹き込まれるような陰の魅力を、
そして季語でもあるように春のしっとり静かな
空気感を表現しました。

紙本著色

1250×1620mm



NO.18

森 (のうねり)

津田 翔一

東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒

近くにいつもあり、通学路でもあったし、今も昔もよく入っていく身近な場所である森のうねり＝生命力を描いた。うねる曲線と溶け合う色彩がそれを表現している。自分がこれまで身近で体感してきた「森」そのものの姿である。

キャンバスに油彩

1303×1620mm



NO.19

黒絵式 -双魚文-

中島 淳志

東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒

古代ギリシャの黒絵式陶器の絵付けと中国の吉祥紋である双魚文を組み合わせました。

水墨画、墨、ベンガラ、画仙紙

1060×695mm×2枚

NO.20

うたかた

新倉 佳奈子

女子美術大学大学院修士課程
美術専攻美術研究科日本画研究領域修了

作品説明文日々描き溜めたドローイングを
貼り合わせて制作しています。
同じように繰り返されながらも少しずつ未
来へ向かって変化を続ける日常の普遍的な
美しさを表現できればと思っています。

和紙、墨、箔、岩絵具、膠

970×1940mm





NO.21

Teen Spirit

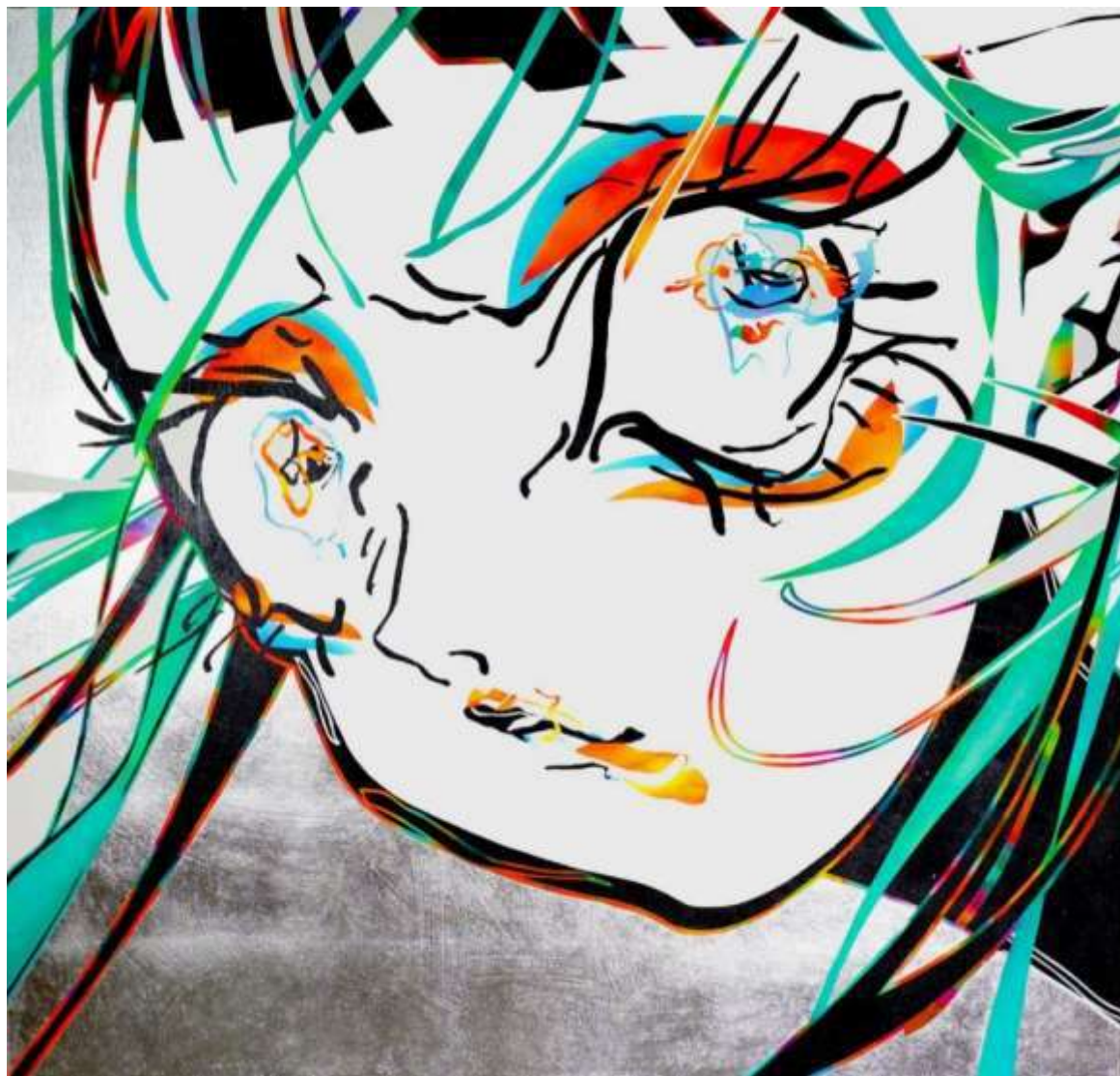
西村 吉弘

京都芸術大学大学院芸術研究科（通信教育）
芸術専攻（修士課程）美術・工芸領域洋画分野

洋楽の歌詞を平仮名で毛筆で幾度も書き、擦り、最後に支持体を左に90°回転させたカリグラフィ。和様の書をモチーフに抽象表現主義以降の現代美術の文脈を踏襲しつつ、偶然の要素を多分に加えて作品とした。

キャンバスにジェッソ下地、アクリル絵具

2273×1818mm



NO.22

脹上

ネイネイ

多摩美術大学大学院
美術研究科博士後期課程美術専攻修了

「グローバル化」に焦点を当て、日本発「カワイイ」現象を歴史的・考現学的に研究し、「カワイイ」の解体と再構築の可能性を提示することが制作のコンセプトである。自作のタイトルである<東京少女>を通して言葉や国の枠を超えて、新たな「カワイイ・カルチャー」の発信を挑戦していく。

アクリル絵の具、キャンバス、パネル、銀箔

910×910mm



NO.23

タイトル

波賀野文子

京都精華大学大学院

博士後期課程芸術研究科芸術領域修了

命が芽吹く初夏の頃、
自然と共に時を重ねる様子を表現した。

パネルに高知麻紙、岩絵具

970×1620mm(額有)



NO.24

sink

服部 秋花

金沢美術工芸大学美術工芸学部日本画専攻卒

人間が魚に変わっていくという非日常的な場面を設定して描きました。成長とともに変化する身体や心。自我同一性を失ってしまうのでは無いかという不安や恐怖を抱えながらも、変化を渴望している私に気づく。矛盾を感じながら身を委ね漂う日々を想い絵画にしました。

土佐麻紙、水干絵具、岩絵具、銀箔、色鉛筆

1700×2150mm(額有)

NO.25

冬野

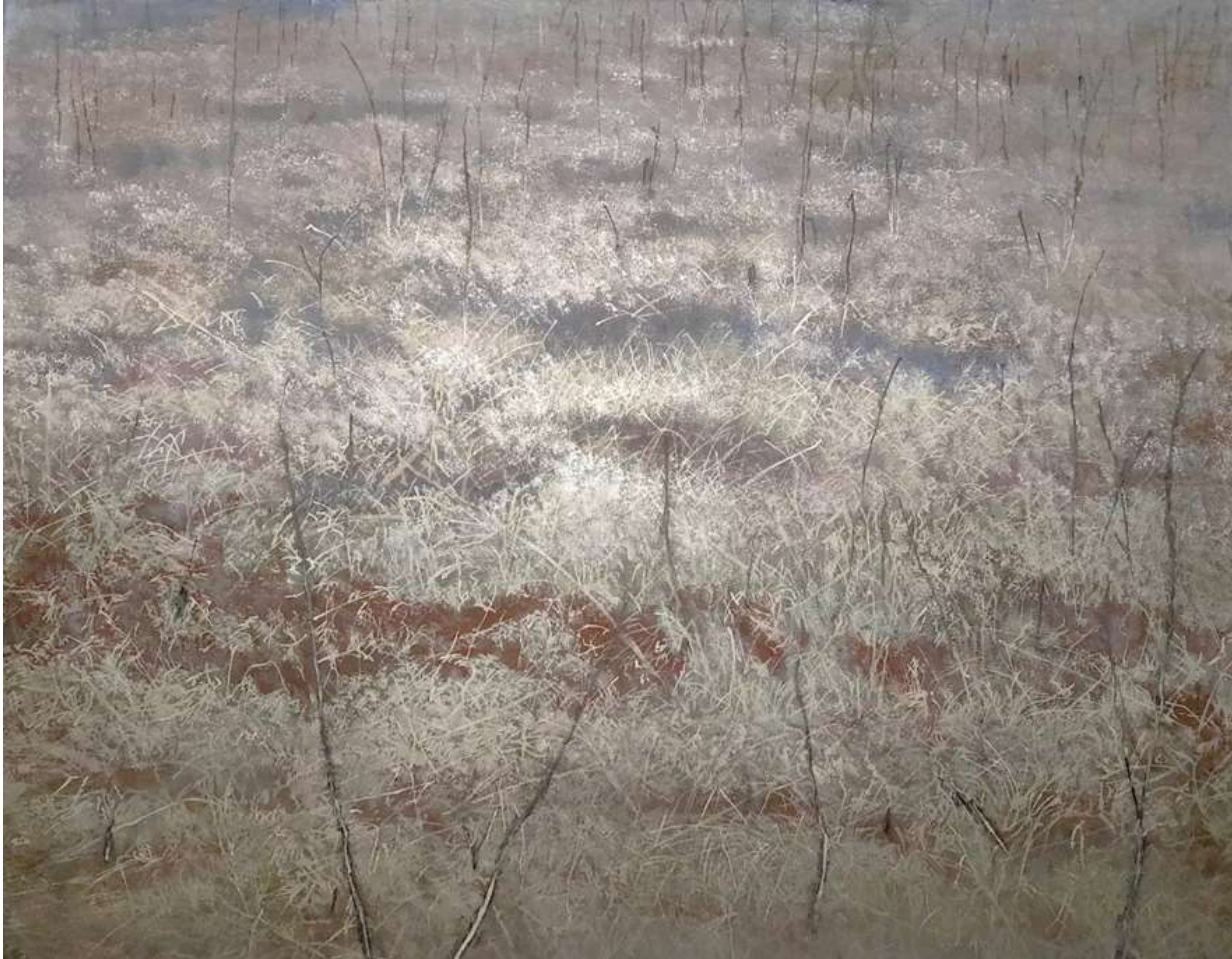
平井 将貴

東京藝術大学大学院美術研究科
文化財保存学専攻保存修復日本画研究室修了

枯れ野原はとても単調で見えていて退屈ですが、私は毎年必ず取材に行きます。モチーフ自体がものを言わぬからこそ、自然というものに私の微力な表現を差し込むことが許されるのが冬という時期であると思います。

和紙に岩絵具(額有)

910×1167mm





NO.26

My Diary 2024 II

平野 えり

武蔵野美術大学油絵学科絵画コース卒

言葉に表しきれない日々の想いを線に込め、
“今現在ここに生きている瞬間”を制作のテーマ
とし描いています。

ミクストメディア、紙、パネル

1644×1964mm(額有)



NO.27

魂のゆらぎ

藤原 華豊

京都市立芸術大学美術科日本画専攻

作品説明文花も人間も儂く、いずれは散りゆくものである。だが、死んでからもそのカタチはただの無となるのではない。魂という別のカタチとなり、また生き始めるのだ。

紙本着彩

2273×1818mm(額有)



NO.28

タイトル

師田 桜子

嵯峨美術大学芸術学部造形学科油画版画領域

説明の出来ない感情、感覚、感性を頼りに完成を決めずに描き進めた。言葉を通さず出てきた表現は私に何を与え、どこへ連れて行ってくれるのか。

キャンバスに油彩

1940×3240mm



NO.29

叢の風景

湯浅 泰将

筑波大学大学院人間総合科学研究科
芸術学学位プログラム日本画領域修了

八つ橋を画面上で折れ曲がった線として構成し、
葦と共に構成した。画面奥へ鑑賞者が没入できる
空間を目指した。

紙本着彩

1620×1303mm(額有)

NO.30

There will be a house in the forest

劉 峻如

京都市立芸術大学美術研究科油絵専攻



この作品では、光と影を通じて、家の形の曖昧さを表現しています。青を基調とした静謐な雰囲気の中、森の中にひっそりと佇む家の輪郭がぼんやりと浮かび上がります。その家は、周囲の木々に包まれながらも、どこか孤独で温かみを感じさせます。まるで夢の中で見たように、現実と幻想が交錯するその家は、観る人それぞれの記憶や感情を呼び起こすきっかけとなり、心の奥底にある「家」のイメージを思い起こさせます。

キャンバスに油彩

1620×1940mm



NO.31

about:blank

和田 華苑

京都市立芸術大学大学院日本画専攻

たとえ更新したページが空白のままでも、
そこに時間は確かに蓄積している。

木材パネルに紙本著彩
岩絵具、胡粉、水干絵具、有機石灰、アルミ箔

2220×920mm(額有)